

補章 小国町第6次総合計画策定に係る各種資料

2 町民意識調査

1) 中学生アンケート調査

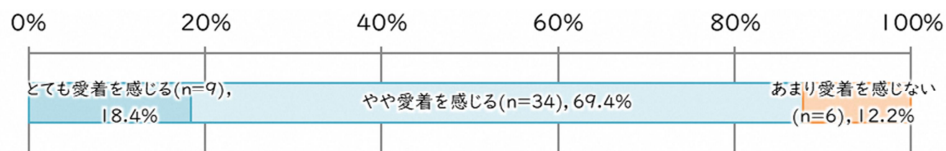
▶アンケート調査概要

調査対象	小国中学校2年生(55名)	調査方法	直接配布回収により実施
調査期間	令和7年5月27日(火)	回収数	49票(回収率:89.1%)

▶アンケート調査結果

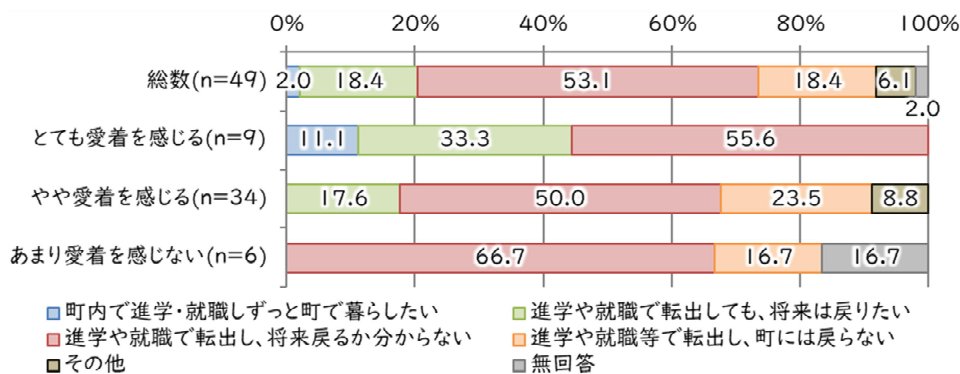
【小国町への愛着の有無】

▶中学生の愛着の有無は、8割以上が愛着を感じており、愛着を感じない層は約12%程度となっています。



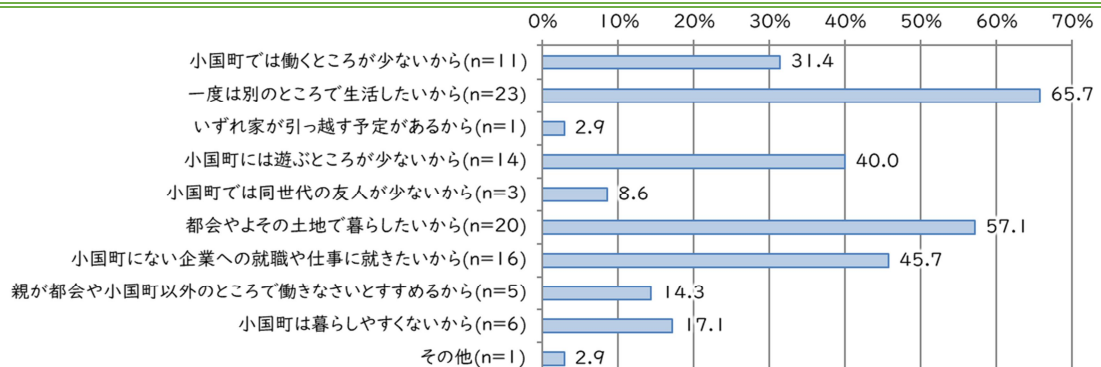
【将来の定住意向(愛着の有無とのクロス集計)】

▶「一度は別のところで生活したいから」が65.7%と最も多くなっており、次いで「都会やよその土地で暮らしたいから」が57.1%となっています。町外に出ていくことは、自然の流れとして許容しつつ、「町外に出て行く理由」ではなく「戻らない理由」を把握しながら、将来戻りたくなる町づくりを戦略的に進める必要があります。



【小国町で暮らしたくない理由(複数回答)】

▶「一度は別のところで生活したいから」が65.7%と最も多くなっており、次いで「都会やよその土地で暮らしたいから」が57.1%となっています。町外に出ていくことは、自然の流れとして許容しつつ、「町外に出て行く理由」ではなく「戻らない理由」を把握しながら、将来戻りたくなる町づくりを戦略的に進める必要があります。



2) 高校生アンケート調査

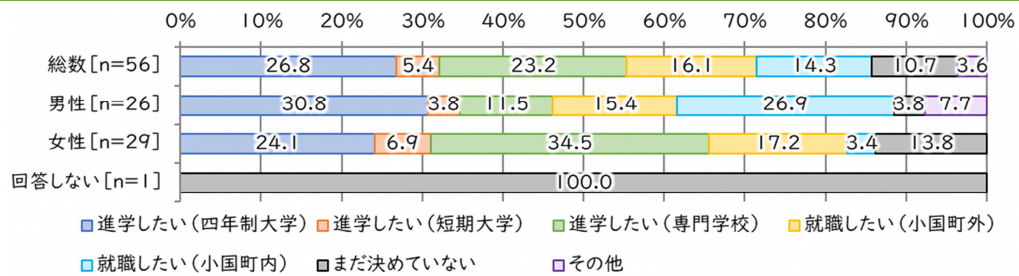
▶アンケート調査概要

調査対象	・小国高校(計63名)／・基督教独立学園(計59名)
調査方法	小国高校はWEB回答フォーム、基督教独立学園は調査票(紙)を配布し、回収
回収数	・小国高校:56票(回収率:88.9%)／・基督教独立学園:51票(〃:86.4%)

▶アンケート調査結果

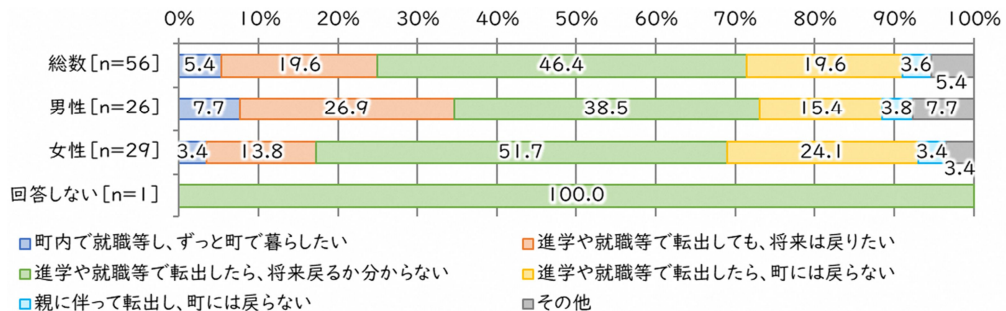
【卒業後の進路】

▶約55%が進学を希望しており、町外への転出が想定される他、町外での就職希望まで含めると、約71%が町外への転出が懸念されています。



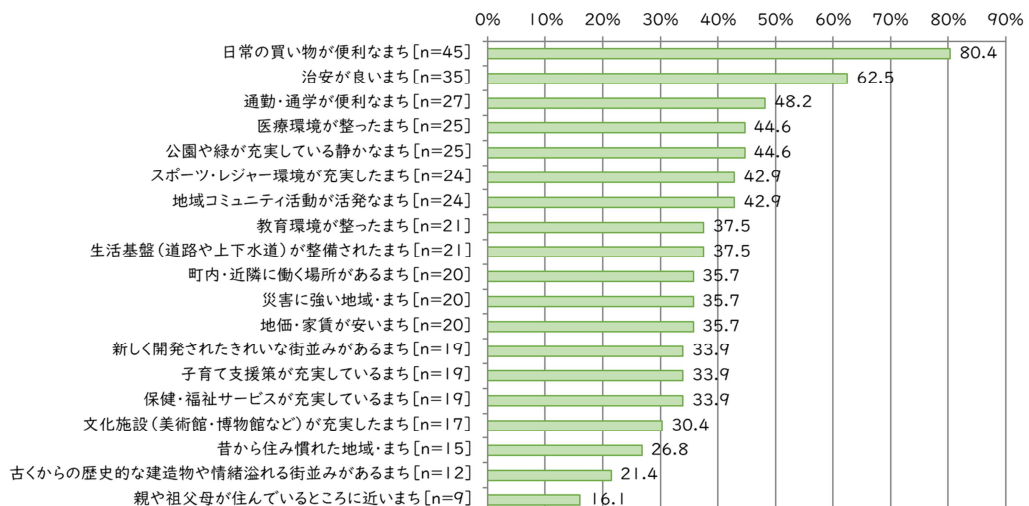
【将来の定住意向】

▶約25%が定住したいという意向(このまま住みたいもしくは将来は戻りたい)を示していますが、約46%が一度町外へ転出したら将来戻るか分からないと回答しています。



【将来住みたい(理想)と思うまち】

▶将来住みたい理想のまちとしては、「日常の買い物が便利なまち」(80.4%)が最も多く、次いで「治安が良いまち」(62.5%)、「通勤・通学が便利なまち」(48.2%)が続き、生活利便性と安全性を重視する傾向が強く見られます。



3) 子育て世代アンケート調査

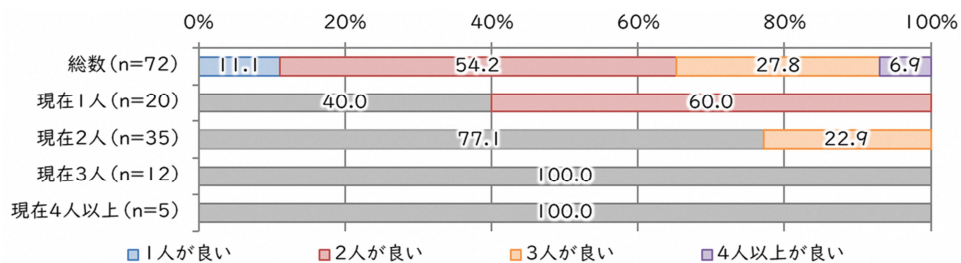
▶アンケート調査概要

調査対象	子育て世代 (保育園・小学校保護者)	調査方法	子育て世代が集まる会合において概要を説明し、WEB 回答を依頼
調査期間	令和7年6月26日～	回収数	72票

▶アンケート調査結果

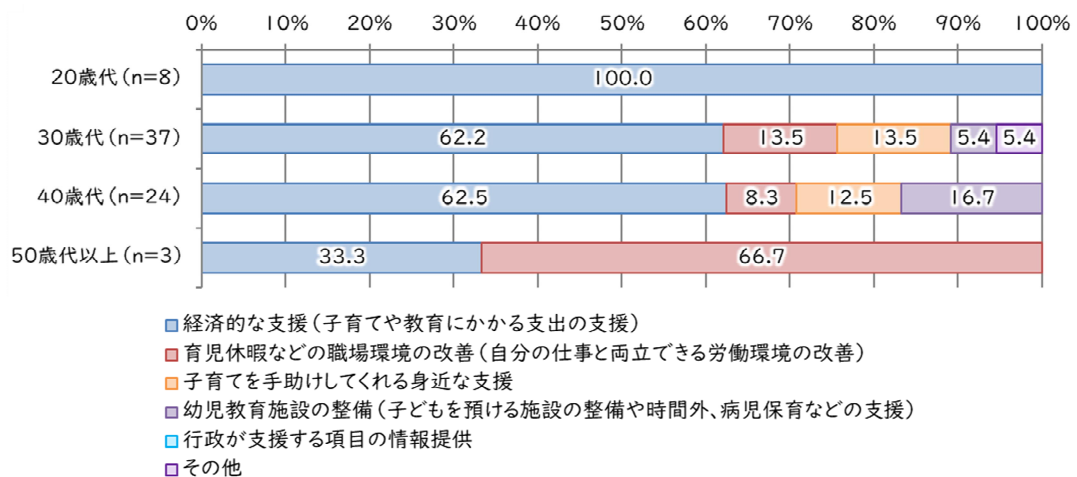
【希望する子ども数】

- ▶希望する子ども数は、2人が約54%と最も多くなっています。
- ▶現在の子どもの数と実際に希望する子どもの数をクロス集計した結果では、現在1人の子どもがいる方は60%が2人目を希望しており、現在2人の子どもがいる方は約22%が3人目を希望しており、多子世帯を望む方が多く見られます。



【希望する子ども数を実現するために望ましい支援】

- ▶希望する子ども数は、2人が約54%と最も多くなっています。
- ▶現在の子どもの数と実際に希望する子どもの数をクロス集計した結果では、現在1人の子どもがいる方は60%が2人目を希望しており、現在2人の子どもがいる方は約22%が3人目を希望しており、多子世帯を望む方が多く見られます。



4) 就業者アンケート調査

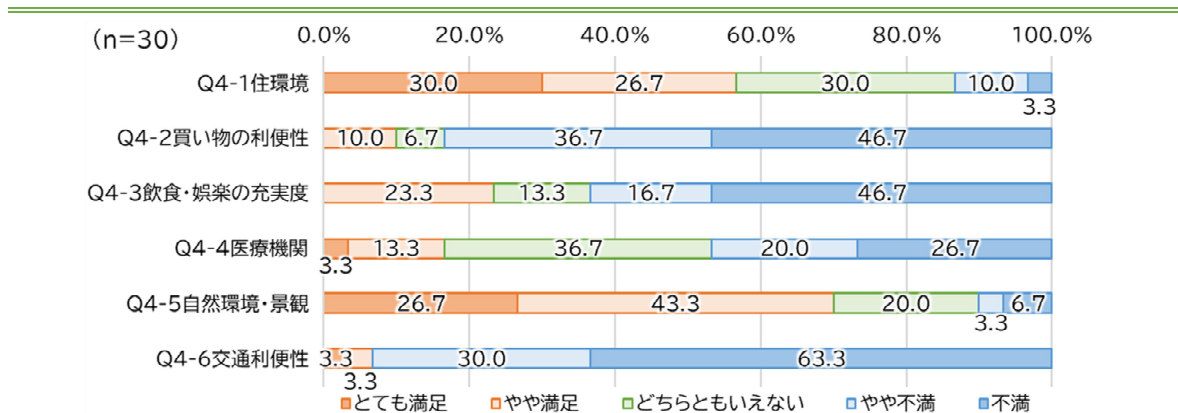
▶アンケート調査概要

調査対象	小国町の各企業の独身寮に居住されている方	調査方法	Webアンケートによる回答
調査期間	令和7年7月15日～8月15日	回収数	30票

▶アンケート調査結果

【小国町での暮らしに関する各項目の満足度とその理由】

▶小国町の生活環境に関する総合的な評価では、「自然環境・景観」に満足とする回答が70.0%と最も高い一方、「交通利便性」では不満層が93.3%に達し、「買い物の利便性」「飲食・娯楽の充実度」でも不満が半数近くを占めるなど、満足度の高低が分野によって大きく分かれる結果となっています。



【特に満足度の低かった項目の理由】

・買い物の利便性の満足度に関する理由

買い物の利便性については、「町内に店舗が少なく、選択肢が限られている」「大型スーパーや安価な食品店がなく、価格が高い」「鮮度の良い野菜や生鮮品が手に入りにくい」「営業時間が短く不便」といった不満が多く寄せられています。また「町内で買い物が完結せず、週末に町外のスーパーでまとめ買いをする」といった声も多く、日常的な生活利便性の低さが課題として浮き彫りになっています。

・医療環境の満足度に関する理由

医療機関については、「内科は毎日診療しており小国町立病院で基本的には対応できる」「山形大学附属病院への連携もあり、緊急時には何とかなる」といった肯定的な意見がある一方で、「皮膚科・眼科・耳鼻科など専門診療科が少なく、受診のために町外へ出ざるを得ない」「曜日や時間が限られ、行きたい時に受診できない」「救急外来がなく不安」といった不満が多く寄せられています。比較的若年層では受診機会が少なく不便を感じにくいものの、専門的医療へのアクセス不足が大きな課題として示されています。

5) 成人式ヒアリング調査

▶アンケート調査概要

調査対象	令和7年度成人式参加者のうち、協力いただける方	調査方法	直接協力依頼の声掛けを行い、その場でヒアリングにより実施
調査期間	令和7年8月14日	回収数	22名(6グループにヒアリングを実施)

▶アンケート調査結果

【小国町の良いところ】

小国町の良さとしては、自然が豊かで空気や水がおいしく、涼しくてのどかな環境が挙げられました。また、人が優しくて近所づきあいがあり安心できる、人の温かさを感じられる点が評価されています。さらに、体育館やプールの施設利用料が安く、落ち着いた雰囲気がある点も町の魅力とされています。

【小国町に物足りないことや困っていたこと】

一方で課題としては、デパートやイオンがなく買い物が不便で、服や雑貨などが買えないことが指摘されています。また、若者が遊べる場所やカフェ・カラオケといった娯楽施設が不足していること、交通手段が少なく移動が不便であること、さらに子どもの遊び場や働く場所が不足していることも課題として挙げられました。

【進学や就職で町を離れて、見えてきたこと(町外に出た方のみ)】

町外に出て改めて見えてきたこととして、バスや電車の本数が少なく、店も少ないといった不便さを実感したという意見がありました。また、人の交流が減り、行事がなくなって寂しくなったという声もあります。その一方で、自然が多く安全安心であり、水がおいしいことが小国町の魅力として改めて認識されています。

【小国町に戻ってこない理由】

「戻らない」と回答した人たちからは、やりたい仕事がなく職種や賃金の選択肢が少ないことが大きな理由として挙げられました。さらに、人口減少による人との交流の減少、教育や子育て環境への不安、交通・買い物・娯楽の不便さなども戻りにくい要因となっています。加えて、関東などの都市部で暮らしたいという都市志向の声も聞かれました。

【同世代が「戻ってきたくなる町」】

同世代が戻りたくなる町の条件としては、小国で働ける仕事があることが最も大きな要素とされています。また、ドン・キホーテや無印良品のように雑貨やコスメを買えるお店があること、子育て支援が充実していることも重要とされています。さらに、外から人を呼び込み、町に活気があることが求められており、若者の活動の場や交流の機会を増やすことが期待されています。

6) 地域住民ヒアリング調査

▶アンケート調査概要

調査対象	各地域で実施しているサロン等に出向き、協力いただける方	調査方法	直接の聞き取りによるヒアリング
調査期間	令和7年7月7日～25日	回答数	34名(4地区合計)

▶アンケート調査結果

【日常生活の困りごと】

①買い物の困りごと

自家用車の保有が買い物手段を大きく左右しており、「車があるうちはなんとかなる」という前提で生活が組み立てられているため、高齢化が進行する中で、車が使えなくなった際の買い物支援体制(宅配・乗合・移動販売等)の更なる強化が必要である。また、アスモ等の町内ではなく、町外依存が進む懸念もある。

②交通(異動全般)の困りごと

移動手段として町営バスが評価される一方で、「バス停までの距離」や「本数・時間帯の使いづらさ」に課題がある。運転免許の返納後、バスやタクシーに完全に頼らざるを得ない層にとっては、交通支援の強化が喫緊の課題である。スクールバスや福祉車両との連携も検討の余地がある。

③除雪の困りごと

「現在はなんとか対応できているが、将来的に不安」との共通認識が強い。特に個人対応から外部委託(シルバー・建設会社)への依存が進む傾向があり、高齢者が多い地域ほど支援ニーズは顕著である。町による除雪支援の拡充や重機の巡回導入も検討課題。

④通院の困りごと

「今は運転できるから問題ない」が大半を占めるが、今後の高齢化を見据えると通院困難者が増加する見込み。町営バスのルート整備やデマンド型交通、訪問診療・移動診療など柔軟な対応が求められる。

【災害時の状況について】

避難所の認知率は高いが、「実際に避難するかどうか」の判断や「安全性の納得感」には地域差。災害時の移動手段や孤立リスクのある世帯への訪問体制の整備が必要。自主防災組織の活動をベースにした具体支援が鍵。

【小国町への居住意向】

「住みたい」というよりは「離れられない」「選択肢がない」というニュアンスが強い。暮らし続けられる条件づくり(交通・買物・医療・つながり)が不可欠。サロンなど地域の居場所の維持も重要。